

翻訳にあたってのヒント

その 38

日本人の英語力

日本では英語教育が極めて盛んであり、英会話教室も昔も今もおおはやりで、書店へいくとずらりと英語関係の書籍が並んでいる。ところが、日本人の英語力は 214 ヶ国中下から数えた上位に入り（一説によると 197 位）、アジアに限っては最下位クラスであり、その下にあるのはスリランカや北朝鮮ぐらいだそう。中学・高校そして大学まで含めると実質 10 年近くも英語を学校で学んでいるのにこの有様なことから驚きだ。しかも通訳業や翻訳業に限って言えば、プロになっているのは多数の英文科卒を含めた大卒者のほんの一握りの人間だけである。昔は英語が下手な 3 ヶ国といえば、日本、韓国、中国だったが、今はもう韓国、中国は日本のはるかに上をいっているという。しかも、外務大臣をはじめとした海外に出なければならない人、つまり企業海外駐在員、政府要人、国際会議等で英語が必須の人たちが、英語が出来ないのである。通訳を介せばいいではないかという意見もあるが、それもはなはだ疑問だ。聞き手は話し手の生の声を聞きたいのであり、通訳が一語一語を正確に通訳しているかは当人の知るところではないのだから、自分の言葉で話すのが一番だと思え、込み入った内容だけ通訳に頼るとするのも一つの手段と考えるからだ。（当然、書面によるやり取りになれば記録として何年も残り、はるかに難しいから、ここは我ら翻訳者の出番にさせていただく！）

否応なしに英語は現在、世界共通語になっている。ASEAN の公用語が英語であることにもみられるように、アジアでの共通語も英語だし、国際舞台となればヨーロッパ、中近東、アフリカ諸国でもそういった傾向がみられる。あまりこんなことを強調すると、英語かぶれの日本人だと言われてしまいそうだが、そういう問題ではない。とにかく、英米人を含めた国際会議の席上でインド人、中国人、韓国人、フィリピン人、マレーシア人、シンガポール人などが流暢な英語で堂々と意見を述べているのに、その脇で言いたいことも言えずに押し黙っている日本人がいたとしたら、それはマズイのではないだろうか。これは、日本の英語教育（英文和訳による英文解釈中心でその逆はあまりやらない）の負の遺産でもあり、英語をせっかく勉強しても日常生活では頻繁に英語を必要としないという日本の実状にもよるものだ。これでは苦勞して覚えた英語が何の役にも立たず終わってしまうのではないだろうか（語学は持続することが大切で、実際に話したり、聞いたり、読んだり、書いたりしないとすぐに忘れてしまう）。しかも我が日本では、事実上、英語を「公用語」かそれに準ずる「第二公用語」ととらえていない。そこで筆者は、思い切って日本の英語教育を根本から変え、いっそのこと「選択性」にして英語を勉強したい人だけに学ばせればいいと考えている。要するに、個人レベルでは英語はまったく不要だが、国レベルや会社レベルになると英語が必須という日本の現状と照らし合わせ、英語を一生使う必要のな

い人に教える必要はないということだ（その代わりに、英語を選択しない生徒には、アジア同胞の言語、例えば中国語、韓国語、マレー語、インドネシア語、タガログ語、ベトナム語、タイ語などや、国際的に普及しているフランス語やスペイン語なども義務教育の一環として教養目的で学ばせるというのもいいかもしれない）。

また、日本人は読み書きはできるが、話せないというのもウソだ。その証拠に「TOEFL」のリスニング・リーディング・文法の 3 分野でも、日本人はどれも平均して、低い点数であるという統計があるからだ。つまり、これは総合的に英語力が低いということなのだ。といっても、筆者は資格至上主義者ではない。今から約 25 年ぐらい前に英検 2 級を取得したが、当時を振り返ると自分の英語に自信があるとはとてもいえなかった。何しろ肝心要の生の英語を知らないのだから、アメリカ人とかろうじて意思の疎通はできるものの、彼らの言っていることがまったく分からないということがよくあったからである（これは、英検の勉強をいくらしても分からないスラング、新語、若者言葉やアメリカ語といえる慣用句が話中に多発することによる）。また、英検に関するある調査によれば、英検資格を持つ大学生の 3 分の 2 が「自分の英語力がビジネス社会で通用と思うか」との質問に対し、「通用と思う」と答えた人は 3.0%と極めて少数で、「通用しない」(97.0%)と考えている人が大多数を占めているという。世間では TOEIC や TOEFL で何点とった、英検 2 級を持っていると胸を張り、翻訳の経験もないのに私はいかにも翻訳のエキスパートだとも受け取れるような大見得を切っている人が少なからず見受けられるが、それも大変な見当違いである。これは例えば、調理師免許を持つはいるが、イタリア料理店や中華料理店で修行したことがない人が、自己流でしかも適正価格で美味しいイタリア料理や中華料理を商業目的で提供できるのか？ということに行き着く問題と同じはずである。ある業務経験の伴わない資格者がその業務の実務の世界で通用しないのと同じ理屈である。こんな訳で、一般的な日本の英語資格はお飾りで有名無実化しているといえる。さらに突っ込んだことを言うと、翻訳初心者や経験数年の翻訳者には、自信満々の人が多い。中には、間違いだらけの翻訳をしておきながら、自分の非を認めずチェッカーや先輩翻訳者の意見に耳を貸さないような態度を取る無礼者もいる。翻訳経験が 1 年未満、数年程度でいい翻訳などできるはずがない。怖い物知らずもいいところである。こういう人達には、通信教育の受講、翻訳学校への通学、そして翻訳現場での修業などを通じて、ベテラン翻訳者から逐一誤りを指摘されながら赤字添削という洗礼を受けることが必要だ。さもなければ、伸びる才能も開花せず竜頭蛇尾で終わるだろう。さらに英文科を出ているということだけを理由に、あの人は翻訳ができるとか自分が翻訳ができるという世間一般の思いこみにも問題がある。そもそも日本の大学の英文科で実務翻訳を教えられたり習得できたりすることはまずないだろうし、その内容は英米人でも難しい英文学に主眼が置かれているのだから、実社会で通用する翻訳をこなすには、専門的な翻訳の勉強が必要だからである。英文ビジネスレターや契約書をまったく訳したことがない人に、大切な事業にかかわるビジネ文書を翻訳させたらどうなるか？その結果は言わずもがな、である。さらに日本市場では、英語の文芸

翻訳と言えば、英語から日本語と相場が決まっており、その逆は日本語に極めて堪能な英語のネイティブだけにしか依頼されないという厳しい現実がある。しかも英語の文芸翻訳で生計を立てている日本人翻訳者が全国でわずか 20 人程度という調査結果もあるほどだ。これは、日本の大学の英文科を出ても文芸翻訳では食べていけないことを如実に物語る一例である。

いまや英語は国際ビジネスに不可欠な道具となり、ビジネスツールとしての意義はますます高まってきているし、技術提携、国際交流、文化交流といったコミュニケーションの分野でもその重要性が高まりつつあるのだから、社会も教育関係者ももっと真剣に今の日本の英語教育を見直すべきではないだろうか。

そうは言っても、語学べたは日本人だけに限らない。アメリカ人がいい例だ。彼らはどこへ言っても英語で押し通そうし、その国の言葉に関心を抱かない傾向がある。これはこれで問題だが、日本人の貧弱な英語力にまつわる本当の問題とは、母国語（日本語）と目標言語（英語）との言語学的距離である。この意味で同列に論ずることはできないが、ヨーロッパには、バイリンガルどころかマルチリンガルな人が多数いる。それは、英語との共通点が多いゲルマン語系（オランダ語・デンマーク語・スウェーデン語・ドイツ語など）やロマンス語系（フランス語・イタリア語・スペイン語など）の言語を話す人々が多いからだ。ちなみに、アメリカ国務省の附属機関である FSI (Foreign Service Institute) の研修生（難関を突破して国務省に採用された官僚の卵で将来の外交官になるエリート達）が、フランス語・ドイツ語・スペイン語などの外国語における日常生活に支障のないスピーキング能力を習得するのに約 720 時間かかったのに対して、日本語・中国語・朝鮮語・アラビア語などの 4 つの言語で同等の能力を習得するには、約 2,400~2,760 時間の集中的な特訓が必要であったという調査がある。この調査に見られるように、こうしたスマートなアメリカ人でも日本語（会話レベル）を話せるようになるは約 3,000 時間（一日 10 時間勉強して 300 日だ！）という特訓が必要なのである。ゆえに、同じ「外国語」として英語を学ぶとしても、日本人はゲルマン語やロマンス語系の語を母語とする話者よりも習得が遅くなるのは当然の成り行きというわけだ。しかしこの反面で、同じようなハンデを負いながら政府高官、企業幹部クラス、営業マン、技術者などの英語に堪能なアジア人がたくさんいることも忘れてはならない。

英語を話す人口が 14~15 億人もいること、そして英語の公用性、通用性、普及性、国際性といった重要な役割を考え、学校の英語教育や英会話教室だけで英語が習得できるという我々の前提自体を疑い、英語を本気で学びたい人や翻訳や通訳などの語学のプロを目指す人達は自ら進んで違ったやり方や特殊な方法で勉強に専念すべきだろう（ただし大変な金と時間がかかるから、そのつもりで・・・）。

以上、これにて日本人の英語力について相当な危機感を持っている私からのメッセージ完了。

これにて、翻訳一口メモ 38 回目終わり。